論文の要約

論 文 題 目　　近代日本における農村地域の文化活動――宮沢賢治を中心に――
氏　　名　　牧　千夏

本論の目的は、宮沢賢治を対象として、近代の日本の農村で人々が中央の思潮をどのように受容し、どのような表現を生んだのか、その一端を明らかにすることである。

近代文学研究において、農村や農民は主要な問題にならなかった。それは、研究の中心が中央の文壇作家やその作品に置かれていたためである。しかし、農村で文学が不毛だったわけではない。それらの農村地域の文化活動を、宮沢賢治を中心的な対象として跡づけるのが、本論文である。

本論は、農民芸術論に着目した第１部と、産業組合に着目した第２部で構成される。

第１章「岩手県における宮沢賢治の経済的・教育的階層」では、宮沢賢治の農民芸術論の講義を受けた花巻農学校および岩手県国民高等学校の生徒の経済的・教育的な階層を確認する。第１部で中心的な分析対象とする農民芸術論は、もとは岩手県国民高等学校で行った講義であった。そのため、この芸術論は、宮沢自身の階層とその生徒の階層が踏まえられている。第１部の前提としてそれらを整理する。

第２章「新教育運動と宮沢賢治「農民芸術概論綱要」」では、１９２０年代の岩手の教育機関において、宮沢賢治の農民芸術論が、どのような文脈に近接したかを論じる。従来、宮沢の農民芸術論は国家主義や全体主義との共犯関係が指摘されてきた。しかし、農民芸術論が講義された岩手の教育機関では、中央の政治的な動向とは異なる傾向があった。岩手の教育界の議論を整理し、それらのなかで宮沢の農民芸術論はどのような位置にあったかを論じる。

第３章「創始期の農民文学論争」では、宮沢の農民芸術論と同時期に起こり、宮沢が参照していたと考えられる農民文学論争を整理する。第１・２章では、農民芸術論を岩手県という地域的な視点から考察した。しかし、農民芸術論は地域の議論や問題に対応すると当時に、中央からの影響も受けていた。特に影響を受けていたと考えられる農民文学論争について整理する。

第４章「農民文学論争と農民芸術概論綱要」では、農民芸術概論綱要が農民文学論争にどう影響を受けたかを整理する。農民芸術概論は、農民文学論争の影響が見られるが、矛盾した派閥の主張を取り入れ組み合わせるといった、独特の方法をとっていた。文壇作家とは異なる文学への関わり方を論じる。

第５章「農民文学としての『春と修羅　第三集』では、農民芸術論の実践として『春と修羅　第三集』を分析する。農民芸術論は、自然科学と仏教とに特徴付けられた生命思想を基底とし、さらに資本主義的な都市文明批判があったことを指摘してきた。それらが、実際の作品にどう表現されているかを論じる。

第２部では、宮沢の文学活動のなかでも産業組合に関連したものを論じる。第１部で論じた農民芸術論の実践の１つとして、産業組合に関連した作品を論じていく。

第６章「産業組合における思想的・文化的展開」では、産業組合主義を中心に、産業組合における思想的・文化的な展開を整理する。そもそも農村の経済機関として始まった産業組合に思想が求められ、その普及のために文化的な展開が起こったことを

論じる。

第７章「『家の光』と宮沢賢治「ポラーノの広場」との農本主義」では、宮沢賢治「ポラーノの広場」に描かれた産業組合を農本主義という視点から分析する。第１部でも触れたように、宮沢の農本主義的な傾向には国家主義との共犯性が指摘されてきた。産業組合では、国家主義的な農本主義が力をもっていたが、宮沢の描く産業組合は、それとどのような関係にあったのか。『家の光』との比較によって論じる。

第８章「産業組合に惹かれた賀川豊彦・平塚らいてう・宮沢賢治」では、賀川豊彦・平塚らいてう・宮沢賢治という３人の作家が、産業組合の〝協同〟の思想に惹きつけられていたことを明らかにする。彼らが階級闘争の批判や元来抱いていた思想によって、左翼団体ではなく産業組合に惹きつけられていく過程を整理する。

第９章「賀川豊彦「乳と蜜の流るゝ郷」と宮沢賢治「ポラーノの広場」とにおける産業組合」では、賀川豊彦「乳と蜜の流るゝ郷」と宮沢賢治「ポラーノの広場」とを比較し、両作品が表現した産業組合について論じる。「乳と蜜の流るゝ郷」が産業組合を推進する小作人を視点に取り、「ポラーノの広場」が産業組合に積極的に関わらない公務員を視点にとったことで、両作品が異なる産業組合のあり方を描き出したことを論じる。

第 10 章「「産業組合青年会」と地方詩壇」では、詩「産業組合青年会」が、産業組合の老人と青年との対立を表現したことを論じ、地域的な問題を詩材にした作品が地方詩壇で受け入れられていたことを指摘する。